

研究ノート

青年男女の化粧基準と自己愛人格傾向との関連性

平松隆円*

Relationship between Makeup Standards and Narcissistic Personality
in Male and Female University Students

Ryuen HIRAMATSU*

Abstract

People acquired lifestyles, behaviours and values that were appropriate as members of a group in their lives. The same was true of makeup. Therefore, people applied makeup in a certain way depending on the situation. There was a set of behavioural guidelines, which could be called the makeup norm, against which they measured their actual behaviour. This study investigated how differences in young people's narcissistic personality affected their makeup standards. This research was conducted using an online questionnaire survey with 118 males ($M = 19.38$ years old, $SD = 1.37$) and 161 females ($M = 19.33$ years old, $SD = 1.11$).

For the male students, it was clear that makeup standards were specified by 'narcissistic personality'. It was also clear that makeup standards were specified by 'leadership' and partially specified by 'self-confidence' on the narcissistic personality subscales. For female students, it was clear that makeup standards were specified by 'narcissistic personality'. It was also clear that makeup standards were partially specified by 'leadership', 'sense of grandeur' and 'need for attention' on the narcissistic personality subscales.

(キーワード 化粧：Makeup, 化粧基準：Makeup Standards,
自己愛人格傾向：Narcissistic Personality, 自己愛：Self-Love,
青年期：Adolescence, 男女差：Gender Differences)

1. はじめに

松岡・十一・宇野¹⁾によれば、若者がファッションに強いこだわりをもつのはファッションを心のよりどころとし、仲間との親密性を重視し、独自の価値観を作り上げ、それを身近に表現できるからであり、自己愛人格傾向が関連している。小塩²⁾によれば、自己愛人格傾向とは自分自身への関心の集中と自信や優越感などの自分自身に対する肯定的感覚、さらにその感覚を維持したいという欲求によって特徴づけられる性格特性のことである。

ある。なお、若者が強いこだわりをもつファッションには衣服だけではなく、化粧も含まれる。

鳥居・鳥居³⁾は、自己愛人格傾向の高い女性は自分の存在感をだすためにアイラインやマニキュアを使用する傾向があることを報告している。また、鳥居・鳥居⁴⁾は自己愛人格傾向が高い女性は、化粧に高い関心があり、素顔にほどほどの自己評価をもつことも報告している。男性におけるみだしなみ行動と自己愛人格傾向との関連では、鳥居⁵⁾はみだしなみに積極的な男性ほど自己愛人格傾向が高いこと、また外見に高い関心があり素顔を見られることに抵抗がない男性は、自己愛人格傾向が高く、自己主張性が高いことを報告している。

* ゲンチャイ大学

平松⁶⁾は具体的な化粧行動と自己愛人格傾向との関連について男女を比較検討し、男性の化粧行動は『自己愛人格傾向』に規定され、下位尺度では『主導性』と部分的ではあるが『自己賞賛』『注目欲求』に規定されること、女性の化粧行動は『自己愛人格傾向』に規定され、下位尺度では部分的ではあるが『自己賞賛』『主導性』『自己確信』『注目欲求』に規定されることを報告している。このように、化粧行動と自己愛人格傾向との関連については、いくつかの先行研究であきらかとなっている。

ところで、ひとは生きるなかで集団の成員としてふさわしい生活様式、行動、価値などを身につける。それは化粧も同様である。それゆえに、ひとは状況に応じて一定の方法で化粧をおこなう。そこには、化粧基準ともいるべき行動のよりどころがあり、それに照らし合わせて実際の行動を決定している。平松⁷⁾によれば、化粧行動には『個性』『社会的調和』『他者同調』という自己顯示的な基準と社会同化的な基準が存在するという。また、平松⁸⁾は青年男女の化粧基準と化粧行動について日本人とタイ人を比較して検討をおこない、日本人とタイ人および男女に共通して化粧基準（『調和』『個性』『同調』）と化粧行動（『スキンケア』『メイクアップ』『クレンジング』『フレグランス』）の構造をあきらかにし、日本人男性の化粧行動は化粧基準の『個性』『同調』が規定し、日本人女性の化粧行動は化粧基準の『個性』が規定していることをあきらかにしている。

このように、これまで化粧行動と自己愛人格傾向の関連性は検討されてきたが、化粧基準と自己愛人格傾向との関連性を検討した研究はみあたらない。だが、化粧行動が自己愛人格傾向に規定されるのと同様に、化粧基準もまた自己愛人格傾向に規定されると仮説でき、人々の化粧に関する行動を詳細に検討していくためには、化粧基準と自己愛人格傾向の関連性について検討することも重要である。なお、平松⁷⁾により自己愛人格傾向以外の個人差要因として男性の化粧基準は公的自意識、私的自意識、外的他者意識が規定し、女性の化粧基準は公的自意識、私的自意識、内的他者意

識、外的他者意識、空想的他者意識が規定することがあきらかとなっている。

そこで本研究は、男女を比較して自己愛人格傾向の違いが化粧基準にどのように影響をおよぼしているのかについて検討する。なお、相良⁹⁾によれば自己愛人格傾向は、中学生・高校生・大学生において大学生が最も高いとされている。そのため本研究では、男女大学生を調査対象に用いた。

2. 調査の概要

2-1 調査の方法、調査時期、調査対象者

2022年1月、神戸市と下関市にある私立大学に通学する学生を対象に、Google Formを用いたオンライン調査をおこなった。倫理的配慮としてGoogle Form冒頭に研究の目的、また回答は任意であり、個人が特定されないことを明記した。

調査対象者は、男性118名 ($M=19.38$ 歳、 $SD=1.37$)、女性161名 ($M=19.33$ 歳、 $SD=1.11$) であった。

2-2 調査内容

1) 化粧基準

Kwon^{10) 11)} や福岡・高木・神山・牛田・阿部¹²⁾の研究における着装基準を参考に作成した平松⁷⁾の化粧基準尺度を用いて、「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの5件法で回答を求め、得点化をおこなった。

平松⁷⁾は化粧の定義を、医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律¹³⁾における化粧品の定義である「人の身体を清潔にし、美化し、魅力を増し、容貌を変え、又は皮膚若しくは毛髪を健やかに保つために、身体に塗擦、散布その他これらに類似する方法で使用されることが目的とされている物で、人体に対する作用が緩和なもの」にしたがっている。本研究では、平松⁷⁾の定義に医薬部外品の「吐きけその他の不快感又は口臭若しくは体臭の防止、あせも・ただれ等の防止、脱毛の防止・育毛又は除毛」も含め、平松¹⁴⁾を参考に装飾（ファンデーション、アイシャドウ、ヘアスタイリング、ヘアカラー、ネイルな

ど)、肌の手入れ（クレンジング、化粧水、乳液など）、香り（フレグランス、デオドラントなど）を化粧として扱い、具体的な化粧の内容をGoogle Form記載し、調査対象者に説明した。

2) 自己愛人格傾向

小西・大川・橋本¹⁵⁾が、Raskin & Terry¹⁶⁾の Narcissistic Personality Inventoryを邦訳し、検討を加えて作成した自己愛人格傾向尺度（NPI-35）を用いて、「あてはまらない（1）」から「あてはまる（5）」までの5件法で回答を求め、得点化をおこなった。

この尺度は自己愛人格傾向の延長線上に自己愛性パーソナリティ障害が存在するという観点から、自己愛性パーソナリティ障害の特徴を考慮に入れ、健常者の自己愛人格傾向を測定する目的で作成された尺度である。『注目欲求』『誇大感』『主導性』『身体賞賛』『自己確信』の5つの下位尺度から構成されており、項目の合計得点が高いほど自己愛人格傾向が高いことを示している。

本研究では、より詳細に化粧基準と自己愛人格傾向の関連性を検討するため、自己愛人格傾向だけではなく、それを構成する下位尺度についても検討をおこなった。

3) フェイス項目

年齢と性別を回答させた。なお、性別についてはセクシャルマイノリティに配慮し、男性・女性・その他の3項目を設定した。今回の研究では、男性もしくは女性と回答したデータのみを分析対象とした。

4) 統計処理

結果の集計・分析は、SPSS Statistics 17.0を用いた。

3. 結果

3-1 化粧基準の構造

化粧基準の構造を確認するため、評定平均値をもとに因子分析（主因子法・Equamax回転）をお

こなった。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準とした。

その結果（Table 1）、第1因子は「自分の好みにあっている化粧をする」「自分らしさが表現できる化粧をする」などの項目が高く寄与したため『個性』（ $\alpha = 0.94$ ）と命名した。第2因子は「目新しく人目をひく化粧をする」「流行にあっていい化粧をする」などの項目が高く寄与したため『顕示性』（ $\alpha = 0.86$ ）と命名した。第3因子は「周囲のひとと同じ化粧をする」「簡単にできる化粧をする」などの項目が高く寄与したため『経済性』（ $\alpha = 0.71$ ）と命名した。

この3因子で簡便的因子得点（各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法）を算出し、以後の分析データとした。

3-2 化粧基準の男女差

化粧基準の各因子の男女差を検討するため、Levene検定により等分散性を確認後、不等分散であった項目についてはAspin-Welchのt検定をおこない、その他の項目についてはStudentのt検定をおこなった。

その結果（Table 2）、『個性』（ $t(957.666) = -21.46$ 、 $p < .001$ ）、『顕示性』（ $t(1117.478) = -11.91$ 、 $p < .001$ ）、『経済性』（ $t(1204.452) = -17.94$ 、 $p < .001$ ）で、男性よりも女性の方が有意に基準としていることがわかった。

3-3 自己愛人格傾向の構造

自己愛人格傾向の構造を確認するため、評定平均値をもとに因子分析（主因子法・Equamax回転）をおこなった。なお、因子の選定は、Kaiser-Guttmanによる最低固有値1.0を基準とした。

その結果（Table 3）、第1因子は「自分の体を誰かに自慢したい」「自分の体を見るのが好き」などの項目が高く寄与したため『自己賞賛』（ $\alpha = 0.85$ ）と命名した。第2因子は「生まれつき、リーダーとしての素質を持っている」「よいリーダーだとおもう」などの項目が高く寄与したため『主導性』（ $\alpha = 0.83$ ）と命名した。第3因子は「人前

Table 1 化粧基準（因子分析・Equamax Method）

| | 1 個性 | 2 顕示性 | 3 経済性 |
|------------------------|---------|----------|----------|
| 自分の好みにあっている化粧をする | 0.70 | 0.35 | 0.35 |
| 自分らしさが表現できる化粧をする | 0.68 | 0.41 | 0.27 |
| 周囲のひとに失礼にならない化粧をする | 0.68 | 0.17 | 0.18 |
| 周囲のひとから信用を損なわない化粧をする | 0.66 | 0.37 | 0.43 |
| 自分の性別や年齢にあっている化粧をする | 0.66 | 0.33 | 0.36 |
| 自分の魅力がアップできる化粧をする | 0.63 | 0.56 | 0.17 |
| 場所柄や雰囲気にあっている化粧をする | 0.58 | 0.55 | 0.24 |
| 自分の社会的地位・立場にふさわしい化粧をする | 0.58 | 0.36 | 0.41 |
| 自分の品位を傷つけない化粧をする | 0.55 | 0.49 | 0.28 |
| 目新しく人目をひく化粧をする | 0.14 | 0.75 | 0.19 |
| 流行にあっている化粧をする | 0.25 | 0.65 | 0.27 |
| 自分を引き立てる化粧をする | 0.58 | 0.60 | 0.14 |
| 内面を引き出す化粧をする | 0.44 | 0.60 | 0.19 |
| 伝統やしきたりにあっている化粧をする | 0.08 | 0.57 | 0.30 |
| 若々しく見える化粧をする | 0.45 | 0.49 | 0.31 |
| 季節にあっている化粧をする | 0.18 | 0.48 | 0.19 |
| 周囲のひとと同じ化粧をする | -0.12 | 0.18 | 0.72 |
| 簡単にできる化粧をする | 0.53 | 0.07 | 0.56 |
| つけ心地がよい化粧をする | 0.41 | 0.09 | 0.47 |
| お金がかからず経済的な化粧をする | 0.40 | 0.33 | 0.42 |
| 固有値 | 10.43 | 1.45 | 1.21 |
| 累積寄与率 | 25.65 | 46.65 | 59.04 |
| α | 0.94 | 0.86 | 0.71 |

Table 2 化粧基準の男女差（t検定）

| | 男 子 | | 女 子 | | 有意水準 |
|-----|------|------|------|------|------------|
| | 平均値 | 標準偏差 | 平均値 | 標準偏差 | |
| 個性 | 2.60 | 1.27 | 3.77 | 0.70 | -21.46 *** |
| 顕示性 | 2.43 | 1.15 | 3.05 | 0.80 | -11.91 *** |
| 経済性 | 2.36 | 1.18 | 3.35 | 0.92 | -17.94 *** |

*** $p < .001$

いでたとき、まわりのひとが私に注意を払ってくれないと落ち着かない気分になる」「周りの人々に影響を与えられる生まれつきの才能がある」などの項目が高く寄与したため『誇大感』($\alpha = 0.83$)と命名した。第4因子は「人生に成功するだろう」「いつも自分のやり方で、なんでも上手く切り抜

けられる」などの項目が高く寄与したため『自己確信』($\alpha = 0.76$)と命名した。第5因子は「チャンスがあれば、自分をよく見せたい」「ほめられたいとおもう」などの項目が高く寄与したため『注目欲求』($\alpha = 0.78$)と命名した。

この5因子と35項目の合計による『自己愛人格

青年男女の化粧基準と自己愛人格傾向との関連性

Table 3 自己愛人格傾向（因子分析・Equamax Method）

| | 1 自己賞賛 | 2 主導性 | 3 誇大感 | 4 自己確信 | 5 注目欲求 |
|---|-----------|----------|----------|-----------|-----------|
| 自分の体を誰かに自慢したい | 0.72 | 0.25 | 0.21 | 0.11 | -0.12 |
| 自分の体を見るのが好き | 0.62 | 0.11 | 0.26 | 0.20 | 0.04 |
| 周りの人々よりはず抜けた人間である | 0.55 | 0.29 | 0.12 | 0.35 | 0.10 |
| 特別な才能をもった人間だとおもう | 0.54 | 0.35 | 0.17 | 0.33 | 0.07 |
| 他のひとより有能である | 0.48 | 0.24 | 0.10 | 0.38 | 0.16 |
| 鏡で自分自身を見るのが好き | 0.46 | 0.18 | 0.21 | 0.07 | 0.22 |
| 注目の的になって、目立ちたいと強くおもう | 0.43 | 0.25 | 0.32 | 0.32 | 0.32 |
| 自己主張をよくする | 0.28 | 0.20 | 0.03 | 0.14 | 0.27 |
| 生まれつき、リーダーとしての素質を持っている | 0.24 | 0.74 | 0.19 | 0.24 | 0.09 |
| よいリーダーだとおもう | 0.28 | 0.67 | 0.15 | 0.25 | 0.10 |
| まわりのひとは、私のリーダーとしての素質を認めている | 0.17 | 0.67 | 0.34 | 0.09 | 0.09 |
| 集団の一員より、リーダーになりたい | 0.25 | 0.60 | 0.21 | 0.19 | 0.26 |
| 物事をやり遂げるために、めったにひとには頼らない | 0.04 | 0.32 | 0.22 | 0.26 | 0.07 |
| 人前にでたとき、まわりのひとが私に注意を払ってくれないと落ち着かない気分になる | 0.19 | 0.28 | 0.59 | -0.01 | 0.11 |
| 周りの人々に影響を与える生れつきの才能がある | 0.27 | 0.32 | 0.51 | 0.47 | 0.00 |
| みんな私の話を聞きたがる | 0.15 | 0.24 | 0.50 | 0.29 | 0.09 |
| 誰かにいつか自分の自伝を書いてもらいたい | 0.34 | 0.09 | 0.49 | 0.29 | 0.13 |
| 欲しいものをすべて手に入れるまで気がすまない | 0.07 | 0.22 | 0.44 | 0.09 | 0.14 |
| 注目の的になりたいとおもう | 0.41 | 0.24 | 0.43 | 0.20 | 0.37 |
| もし私が世界のルールを作れるなら、もっと世界はよくなるだろう | 0.19 | 0.17 | 0.43 | 0.12 | 0.20 |
| 自分の思い通りに人を使うのは簡単だ | 0.24 | 0.34 | 0.42 | 0.25 | -0.02 |
| 人生に成功するだろう | 0.13 | 0.17 | 0.10 | 0.55 | 0.25 |
| いつも自分のやり方で、なんでも上手く切り抜けられる | 0.21 | 0.11 | 0.13 | 0.53 | 0.12 |
| どんなことでもみんなを信用させることができる | 0.19 | 0.32 | 0.27 | 0.48 | 0.17 |
| いつも自分の行動を理解している | 0.12 | 0.13 | 0.05 | 0.46 | 0.13 |
| 将来、偉大なひとになるだろう | 0.35 | 0.41 | 0.23 | 0.44 | 0.17 |
| どんなことでもあえて挑戦する | -0.03 | 0.25 | 0.30 | 0.35 | 0.29 |
| 控え目な人間ではない | 0.20 | 0.13 | 0.14 | 0.20 | 0.15 |
| チャンスがあれば、自分をよく見せたい | 0.21 | 0.14 | 0.12 | 0.13 | 0.59 |
| ほめられたいとおもう | -0.02 | -0.07 | 0.11 | -0.02 | 0.54 |
| 世間のひとから見て、とても優れたひとになりたいとおもう | 0.07 | 0.08 | 0.06 | 0.18 | 0.52 |
| 周りの人々に影響をおよぼすような権威をもちたいとおもう | 0.31 | 0.22 | 0.32 | 0.15 | 0.51 |
| 自分の決断には責任をもちたい | -0.17 | 0.13 | -0.06 | 0.17 | 0.49 |
| 自分にふさわしい尊敬を受けたい | 0.12 | 0.01 | 0.43 | 0.28 | 0.44 |
| 権力を持ちたいと強くおもう | 0.29 | 0.18 | 0.38 | 0.14 | 0.43 |
| 固有値 | 11.74 | 2.25 | 1.51 | 1.50 | 1.29 |
| 累積寄与率 | 9.16 | 18.26 | 26.20 | 33.53 | 40.78 |
| a | 0.85 | 0.83 | 0.83 | 0.76 | 0.78 |

Table 4 自己愛人格傾向と自己愛人格傾向の下位尺度の男女差（t 検定）

| | 男 子 | | 女 子 | | 有意水準 |
|---------|------|------|------|------|-----------|
| | 平均値 | 標準偏差 | 平均値 | 標準偏差 | |
| 自己賞賛 | 2.78 | 0.74 | 2.28 | 0.72 | 13.83 *** |
| 主導性 | 2.78 | 0.74 | 2.37 | 0.90 | 10.23 *** |
| 誇大感 | 2.87 | 0.76 | 2.43 | 0.79 | 11.52 *** |
| 自己確信 | 3.14 | 0.71 | 2.84 | 0.68 | 8.57 *** |
| 注目欲求 | 3.58 | 0.70 | 3.39 | 0.74 | 5.03 *** |
| 自己愛人格傾向 | 3.03 | 0.59 | 2.66 | 0.63 | 11.99 *** |

*** p < .001

Table 5 化粧基準を規定する自己愛人格傾向（男性・強制投入）

| | 個性 | | 顯示性 | | 経済性 |
|---------|------|----|------|-----|------|
| 自己愛人格傾向 | 0.11 | ** | 0.17 | *** | 0.02 |
| R^2 | 0.01 | ** | 0.03 | *** | 0.00 |

*** $p < .001$, ** $p < .01$

Table 6 化粧基準を規定する自己愛人格傾向（女性・強制投入）

| | 個性 | | 顯示性 | | 経済性 |
|---------|------|-----|------|-----|-------|
| 自己愛人格傾向 | 0.27 | *** | 0.48 | *** | -0.05 |
| R^2 | 0.07 | *** | 0.23 | *** | 0.00 |

*** $p < .001$

Table 7 化粧基準を規定する自己愛人格傾向の下位尺度（男性・Stepwise）

| | 個性 | | 顯示性 | | 経済性 |
|-------|------|-----|------|-----|----------|
| 自己賞賛 | | | | | |
| 主導性 | 0.18 | *** | 0.24 | *** | 0.17 *** |
| 誇大感 | | | | | |
| 自己確信 | | | | | -0.12 * |
| 注目欲求 | | | | | |
| R^2 | 0.03 | *** | 0.06 | *** | 0.02 * |

*** $p < .001$, * $p < .05$

Table 8 化粧基準を規定する自己愛人格傾向の下位尺度（女性・Stepwise）

| | 個性 | | 顯示性 | | 経済性 |
|-------|------|-----|------|-----|----------|
| 自己賞賛 | | | | | |
| 主導性 | 0.17 | *** | 0.40 | *** | |
| 誇大感 | | | 0.17 | *** | -0.16 ** |
| 自己確信 | | | | | |
| 注目欲求 | 0.20 | *** | | | |
| R^2 | 0.10 | *** | 0.29 | *** | 0.01 ** |

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

傾向』（ $\alpha = 0.94$ ）で簡便的因子得点（各因子をより明確にするため、因子ごとに高く負荷する項目の得点を合計し、それをその項目数で除する方法）を算出し、以後の分析データとした。

3-4 自己愛人格傾向の男女差

『自己愛人格傾向』とそれを構成する 5 因子の男女差を検討するため、Levene 検定により等分散性を確認後、不等分散であった項目については

Aspin-Welchのt検定をおこない、その他の項目についてはStudentのt検定をおこなった。

その結果(Table 4)、『自己賞賛』($t(1638) = 13.83, p < .001$)、『主導性』($t(1628.880) = 10.23, p < .001$)、『誇大感』($t(1528.984) = 11.52, p < .001$)、『自己確信』($t(1655) = 8.57, p < .001$)、『注目欲求』($t(1647) = 5.03, p < .001$)、『自己愛人格傾向』($t(1619) = 11.99, p < .001$)で有意に男性の方が女性よりも高いことがわかった。

3-5 化粧基準を規定する自己愛人格傾向

化粧基準を規定する『自己愛人格傾向』をあきらかにするため、化粧基準を目的変数とし、『自己愛人格傾向』を説明変数とする単回帰分析を男女別におこなった。

男性(Table 5)では、『個性』($\beta = 0.11, p < .01$)、『顯示性』($\beta = 0.17, p < .001$)と有意な関連を示した。

女性(Table 6)では、『個性』($\beta = 0.27, p < .001$)、『顯示性』($\beta = 0.48, p < .001$)と有意な関連を示した。

3-6 化粧基準を規定する自己愛人格傾向下位尺度

化粧基準を規定する『自己愛人格傾向』の下位尺度をあきらかにするため、化粧基準を目的変数とし、『自己愛人格傾向』の下位尺度の各因子を説明変数とする重回帰分析を男女別にStepwiseによる変数選択法でおこなった。

男性(Table 7)では、『個性』は『主導性』($\beta = 0.18, p < .001$)が有意に選択された。『顯示性』は『主導性』($\beta = 0.24, p < .001$)が有意に選択された。『経済性』は『主導性』($\beta = 0.17, p < .001$)と『自己確信』($\beta = -0.12, p < .05$)が有意に選択された。

女性(Table 8)では、『個性』は『主導性』($\beta = 0.17, p < .001$)が有意に選択された。『顯示性』は『主導性』($\beta = 0.40, p < .001$)と『誇大感』($\beta = 0.17, p < .001$)が有意に選択された。『経済性』は『誇大感』($\beta = -0.16, p < .01$)が有意に選択された。

4. 考察

4-1 化粧基準

化粧基準の構造を確認するため因子分析をおこなったところ、『個性』『顯示性』『経済性』の3因子があきらかとなった。平松⁷⁾では、『個性』『社会的調和』『他者同調』という自己顯示的な基準と社会同化的な基準があきらかとなっているが、今回の研究では『個性』は一致するもの、社会同化的な基準は見受けられず、むしろ自己顯示的な基準が顯著にあらわれる結果となった。また「周囲のひとと同じ化粧をする」「簡単にできる化粧をする」「お金がかからず経済的な化粧をする」といった、簡便さや金銭的な側面の基準があきらかとなった。異なる因子があきらかとなった理由については、平松⁷⁾の調査から10年以上たっていることによる影響など考えられるが、今後詳細な検討が必要である。

化粧基準の男女差はすべての因子で認められ、女性の方が男性よりも『個性』『顯示性』『経済性』を基準にしていることがあきらかとなった。これは、平松⁶⁾が男性は女性よりも化粧行動をおこなっていないことをあきらかにしているが、本研究においても男性は女性に比べ化粧行動をおこなっていないことが推測される。このことから、化粧行動をおこなわないことが化粧基準を意識することの低さに関連していると推測される。

4-2 自己愛人格傾向

『自己愛人格傾向』を構成する因子を確認するため因子分析をおこなったところ、『自己賞賛』『主導性』『誇大感』『自己確信』『注目欲求』の5因子があきらかとなり、小西・大川・橋本¹⁵⁾の自己愛人格傾向尺度と同様な因子構造があきらかとなった。しかしながら、各因子に負荷する項目は一部異なり、『身体賞賛』は本研究では身体だけではなく、「私は、特別な才能をもった人間だとおもう」「私は、他のひとより有能である」などの項目も含まれ、全体的な自己に対する賞賛がまとまる結果となった。天満・日高¹⁷⁾によれば、自己愛という概念は基本的には自分が自分を愛す

ることであるが、世代や文化によって影響を受けるものであるとされ、葛西¹⁸⁾は文化差を報告している。そのため、本研究における自己愛人格傾向の各因子に負荷する項目が小西・大川・橋本¹⁵⁾の自己愛人格傾向尺度の結果と異なった理由には、世代差や文化差があると推測されるが、今後詳細な検討が必要である。

『自己愛人格傾向』を構成する下位尺度の5因子ならびに『自己愛人格傾向』の男女差は全ての因子で認められ、男性の方が女性よりも高いことがあきらかとなった。自己愛人格傾向に関する先行研究では、男性の方が女性よりも高いことが報告^{19) 20) 21) 22)}されており、本研究の結果は、それらと一致するものである。男女差が認められた理由については、女性は男性とは異なる対人関係をもち、それが自己愛人格傾向にも影響を与えていくという松並²³⁾の指摘などがある。

4-3 化粧基準を規定する自己愛人格傾向

化粧基準を『自己愛人格傾向』が規定するかについて検討をおこなったところ、男女共通して『自己愛人格傾向』が高い者ほど、『個性』『顯示』を基準としていることがあきらかとなった。これまでの研究で、『自己愛人格傾向』が高い者は外見への関心が高いことなどが報告されているが、本研究の結果から、化粧行動のよりどころである化粧基準において、『自己愛人格傾向』が高い者ほど自己顯示的な基準がより意識されることがあきらかとなった。

より詳しく化粧基準と『自己愛人格傾向』の関連を検討するため、化粧基準を『自己愛人格傾向』を構成する下位尺度がどのように規定するかについて検討をおこなったところ、男性の『個性』では『主導性』が高い者ほど基準としていることがあきらかとなった。すなわち、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度な者ほど『個性』を基準としている。『個性』は、自分の好みにあっている化粧をすることや自分らしさが表現できる化粧をするなどを重視する基準であり、自己主張的な『主導性』が規定していると推測される。『顯示性』では『主導性』が

高い者ほど基準としていることがあきらかとなつた。すなわち、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度な者ほど『顯示性』を基準としている。『顯示性』は『個性』以上に自己顯示的な基準であり、自己主張的な『主導性』が規定していると推測される。『経済性』では『主導性』が高く、『自己確信』が低い者ほど基準としていることがあきらかとなつた。すなわち、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度で、自分がおこす行動に関して自分自身を肯定的・確信的にとらえない者ほど『経済性』を基準としている。『経済性』は簡便さや金銭的な側面の基準であり、周囲のひとと同じ化粧をするという同調的な項目も含まれている。そのことから、どのような化粧行動をしていいか・するべきかという自分の行動に対する不確信的な態度な者ほど、周囲のひとと同じ化粧をしたり、簡単にできる化粧をしたりという『経済性』を基準としていると推測される。自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度の『主導性』が『経済性』を規定しているのは、男性においてまだまだ化粧行動がおこなわれておらず、化粧基準を意識することも少ないなかで、どのような化粧をするべきか周囲を参考にしているからだと推測される。平松⁸⁾は、化粧基準が化粧行動を規定することをあきらかにしており、本研究においても化粧基準を意識する者は、意識しない者に比べより化粧行動をおこなっていると推測される。また平松・牛田²⁴⁾は、男性に対する化粧期待は低いことをあきらかにしているが、そのなかで、化粧行動をおこない化粧基準を意識する者は、周囲に影響されず自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする者であると推測される。これについては、『個性』『顯示性』も同様と推測される。

女性の『個性』では『主導性』『注目欲求』が高い者ほど基準としていることがあきらかとなつた。すなわち、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度で、他者に自分の存在をより望ましく示し、注目されることを強く期待する者ほど『個性』を基準としている。

『個性』は、自分の好みにあっている化粧をすることや自分らしさが表現できる化粧をすることなどを重視する基準であり、自己主張的な『主導性』や他者からの注目を期待する『注目欲求』が規定していると推測される。『顯示性』では『主導性』『誇大感』が高い者ほど基準としていることがあきらかとなった。すなわち、自分の意見や考えを全面的にはっきりと表出しようとする積極的な態度で、自分は他者よりも優れた能力がある人間だと自分自身をとらえる者ほど『顯示性』を基準としている。『顯示性』は目新しく人目をひく化粧をすることや自分を引き立てる化粧をすることなどを重視する基準である。そのため、自己主張的な『主導性』や自分は優れているととらえることに裏打ちされる自信である『誇大感』が規定していると推測される。『経済性』では『誇大感』が低い者ほど基準としていることがあきらかとなった。すなわち、自分は他者よりも優れた能力がある人間だと自分自身をとらえない者ほど『経済性』を基準としている。『経済性』は簡便さや金銭的な側面に加え、同調的な項目も含まれていることから、自分は優れていると自信がないことが、周囲のひとと同じ化粧をするという『経済性』を基準としていると推測される。

5.まとめと今後の課題

本研究では、青年男女の化粧基準と自己愛人格傾向の関連性について検討をおこなった。えられた結果を要約すると、次の通りとなる。

- 1) 化粧基準は、『個性』『顯示性』『経済性』の3因子があきらかとなり、男女差はすべての因子で認められた。
- 2) 自己愛人格傾向は、『自己賞賛』『主導性』『誇大感』『自己確信』『注目欲求』の5つの下位尺度で構成されていることがあきらかとなり、『自己愛人格傾向』を含めて男女差はすべての因子で認められた。
- 3) 男性の化粧基準は『自己愛人格傾向』に規定され、下位尺度では『主導性』と部分的ではあるが『自己確信』に規定されていた。女性

の化粧基準は『自己愛人格傾向』に規定され、下位尺度では部分的ではあるが『主導性』『誇大感』『注目欲求』に規定されていた。

今後の課題として、より多様なサンプルを対象として知見の一般性を吟味したい。

参考文献

- 1) 松岡依里子・十一玲子・宇野保子：自己愛傾向とファッション行動との関連、日本家政学会研究発表要旨集、66、p145、2014年
- 2) 小塩真司：青年の自己愛傾向と自尊感情 友人関係のあり方との関連、教育心理学研究、46(3)、pp.280-290、1998年
- 3) 鳥居さくら・鳥居潤：化粧行動と自己愛的な人格傾向との関連における年代比較、日本心理学会第78回大会発表論文集、p35、2014年
- 4) 鳥居さくら・鳥居潤：女子大学生における化粧行動と自己愛的な人格傾向との関連、日本顔学会誌、16(2)、pp.61-69、2016年
- 5) 鳥居さくら；男性のみだしなみ行動と自己愛的な人格傾向との関連、神戸松蔭女子学院大学研究紀要人間科学部篇、6、pp.137-147、2017年
- 6) 平松隆円：青年男女の化粧行動と自己愛人格傾向との関連性、ファッションビジネス学会論文誌、27、pp.1-10、2022年
- 7) 平松隆円：化粧行動を規定する化粧基準の構造解明、佛教大学教育学部学会紀要、9、pp.147-154、2010年
- 8) 平松隆円：化粧基準と化粧行動の日タイ比較、繊維製品消費科学、58(3)、pp.22-31、2017年
- 9) 相良麻里；青年期における自己愛傾向の年齢差、パーソナリティ研究、15、pp.61-63、2006年
- 10) Yoon-Hee Kwon ; Daily Clothing Selection : Interrelationships Among Motivating Factors, Clothing and Textiles Research Journal, 5(2) : 21-27、1987年
- 11) Yoon-Hee Kwon ; Effects of Situational and

- Individual Influences on the Selection of Daily Clothing、Clothing and Textiles Research Journal、6(4)、pp.6-12、1988年
- 12) 福岡欣治・高木修・神山進・牛田聰子・阿部久美子；着装規範に関する研究(第1報)—生活場面と着装基準の関連性—、纖維製品消費科学、39(11)、pp.42-48、1998年
- 13) 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律（昭和35年法律第145号）（令和4年法律第47号による改正）
- 14) 平松隆円；化粧にみる日本文化、水曜社、2009年
- 15) 小西瑞穂・大川匡子・橋本宰；自己愛人格傾向尺度（NPI-35）の作成の試み、パーソナリティ研究、14(2)、pp. 214-226、2006年
- 16) Robert Raskin・Howard Terry；A principal-components analysis of the Narcissistic Personality Inventory and further evidence of its construct validity、Journal of Personality and Social Psychology、54(5)、pp.890-902、1988年
- 17) 天満翔・日高三喜夫；自己愛に関する研究—新たな質問紙の作成、久留米大学心理学研究、11、pp. 128-134、2012年
- 18) 葛西真記子；日本版「誇大感（Grandiosity）」欲求尺度作成の試み—Kohutの自己愛論にもとづいて—、カウンセリング研究、32、pp. 134-144、1999年
- 19) 小塩真司；自己愛傾向に関する研究—性役割との関連—、名古屋大学教育学部紀要、46、pp.45-53、1998年
- 20) 清水健司・海塚敏郎；青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連、教育心理学研究、50、pp.54-64、2002年
- 21) 小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪；自己愛人格傾向についての素因—ストレスモデルによる検討、パーソナリティ研究、17、pp.9-38、2008年
- 22) 川崎直樹・小玉正博；自己に対する受容的認知のあり方から見た自己愛と自尊心の相違性、心理学研究、80、pp.527-532、2010年
- 23) 松並知子；自己愛の病理性の性差—他者への依存と自己誇大化、パーソナリティ研究、22(3)、pp.239-251、2014年
- 24) 平松隆円・牛田聰子；化粧に関する研究（第1報）—大学生の化粧関心・化粧行動・異性への化粧期待の構造解明—、纖維製品消費科学、44(11)、pp.58-68、2003年